

Doctors White Paper

自分だけの価値観を大切に
する人。医師という職業に真
正面から向き合う人。ブレ
ンシオがフォーカスする。彼
ら独特の考え方やライフス
タイルに人生をより豊かにす
るためのヒントが見えてく
る。



毎日弾いてあげないと遠端に機嫌が悪く
なってしまうんです。20年以上の付き
合いとなる良きパートナー、アマティで
美しいメロディーを奏でる鈴木さん

院長は

バイオリニスト 哀愁と憂いに満ちた メロディーで魅了



文●細貝 智
写真●長尾里絵

咲き誇る花々が 元気のサイン

手入れの行き届いた鉢植えがグル
リと囲むレンガ造りの建物。中に入
れば色鮮やかな花々が来る者を暖か
く出迎えてくれる。
「花がキレイに咲いていれば、訪
れる患者さんに、私は元気に治療に
勤しめますよ。っていうサインに
なると思ってた。ガーデニングを始めた
んです。もう15年ほどになるでしょ
うか。」

名古屋市太白区で眼科クリニック
を開く鈴木直子さんはそう言うのと、
待合室に置かれた花の名前を一つ一
つ丁寧に教えてくれた。
この地にクリニックを構えて今年
で33年。今では親子3代にわたって
診てもらっている患者さんも少なく
ないという。これもひとえに鈴木さ
んの飾らない人柄、そして長い時間
をかけて築いた患者さんとの信頼関
係の賜物に他ならない。
3人のご子息がそれぞれ眼科医と
して独立した今、のんびりと自分の

時間を有意義に過ごされているかと
思いきや、院長として毎日欠かさず
診療にあたり、気づいたら一日が終
わっているといった多忙な生活を送
っている。
「夜の11時になってようやく落ち
着くという感じです。プライベート
の過ごし方は人それぞれでしょうけ
ど、私の場合はこれですわね。」

そう言いながら、持ってきたのは
20年以上愛用しているというバイオ
リン。あのストラディヴァリの師匠
にあたるという偉大なバイオリン製
作者、ニコロ・アマティの手による
名器だ。それを構えるや、先ほどま
での穏やかな表情とは打って変わ
り、真剣な眼差しで流麗な調べを奏
で始めた。悲しいかな、クラシッ
クに疎い耳にはそれがどれほど素晴
しい曲かは分からない。と、ここで
曲調がガラリと変わり、どこか聞き
覚えのあるメロディーが。アンパン
マンの主題歌だ。孫達によく聴かせ
てあげるんですよ、と途端に小学3
年生を頭に7人の孫を持つおばあち
ゃんの顔に戻った。

幼少時から常に 傍らにあったバイオリン

バイオリンを習い始めたのは5歳
というから、そのキャリアは相当に
長い。まだ戦後の雰囲気の色濃かつ
た時代のことである。当時の日本で
バイオリンを習うというのは決して
簡単なことではなかったはずだ。鈴
木さんはバイオリンの楽しさに目覚
め、メキメキと上達していったが、
あくまで趣味のひとつとして割り切
っていたという。

「父に言われたんです。音楽を仕
事にするのは大変。趣味でやればち
よっと上手いぐらいでも誉められる
から、それぐらいの考えでいい」と。
また身内に医者が多かったこと
も、将来を決めるのに大きく作用し
た。やがて医大に進むべく受験勉強
の忙しさからバイオリンとも距離を
置くようになる。だが、暗れて医大
に進学した後、鈴木さんを待ち受け
ていたのは、やはりバイオリンだっ
た。
「新入生ですごくバイオリンの上

手い子が入ってくる、なんて大袈裟
な噂になっていたんです。決してそ
んなことないんですけど……」
本人は謙遜されているが技量がな
ければ、そこまでの話にはならない
はず。半ばスカウトされるような形
で大学にあった「名市大オーケスト
ラ」に加入、新入生ながらコンサー
トマスターに推される。いわゆるオ
ーケストラのまとめ役で、一般には
第1バイオリンのトップ(首席奏者)
が担うとされている。

医大卒業後、医局勤務、開業を経
て、医師としてはもちろん、3人の
子を持つ母として多忙を極めながら
も、傍らには常にバイオリンがあっ
た。6年前まで所属していた愛知県
医師会交響楽団の定期演奏会でも、
鈴木さんの奏でる哀愁を帯びた音色
が会場に集まった人々を魅了した。
今でもスケジュールが合えば、福祉
活動の一環として施設などに演奏し
に出掛けることがあるという。
もっともっと上手くなりたい、そ
のためにはとにかく弾くこと。間が
空いてバイオリンが良い音で鳴らな



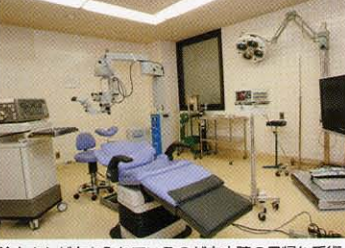
大学1年の時、八甲田・八幡平旅行で見た紅葉に感
動して以来の紅葉好き。秋が近づくと単身、愛用の
スニーカーで出掛けて行くこともしばしば



1996年2月25日、リトアニア医療の支援の為、愛
知県芸術劇場コンサートホールで行われた愛知県医
師会交響楽団によるチャリティー演奏会の様子



クリニックの待合室に並ぶ美しい花々は鈴木さんの
元気のバロメーターだ。診察を待つ患者さんの不安
を和らげるのにも大きな効果を発揮している



鈴木さんが力を入れているのが白内障の日帰り手術。
技術の進歩とデータの蓄積で、日帰りでも問題ない
ことが確立され、受ける人は増加傾向にあるという

PROFILE



●鈴木 直子 (すずき なおこ)
1942年、岐阜市出身。名古屋市立大学医学部
卒業後、同大学眼科学教室入局。1975年より
名古屋市太白区にて「鈴木眼科病院」を開業。
バイオリン、ガーデニングの他、キャリア30年
というゴルフ好きの一面も。ただしハンデ36の
万年ビギナーとは本人の弁。バイオリンを習い
始めた孫の成長がなによりの楽しみという良き
家庭人でもある